ロード 運命の流れ

希望の夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロード 運命の流れ

【Nコード】

N8510H

【作者名】

希望の夢

【あらすじ】

日々鐘の町。十数年前に日本で新しく出来た有名な穏やかに流れていた世界があった。その世界に踏みとどまった少年少女達が巡り合い、知りえなかった「真実」を得る。

序章

序章

静かに風が流れる広々とした日々鐘の公園。そこへ俺は足を踏み入れる。

「……………」

目をゆっくり開き全体を見渡す。

「懐かしいな……………」

ここ日々鐘の町にやってきたのは7年ぶりだ。
あの日から感じた流れは消え入りそうだ。

「随分と久しぶりじゃないか」

後ろから声をかけられる。

「なあ？桐原きりはら 光ひかり」

180cmとした高身長たか身長の男性おとこが言う。

「そうだな……………空梧」

その男の名は宮本みやもと 空梧くうこ。7年ぶりに会う友人だ。

「デビューおめでとう。夢は叶ったんだな」

宮本 空梧は数年前よりバイオリニストとしてデビューしている。世界で彼の名を知らない人はあまりいないだろう。彼の旋律は心に響く。

「ああ、叶ったさ。あの時は思ってもいなかった」

「よく聞いているよ。本当におめでとう」

俺は空梧と握手をする。この握手も7年ぶりだ。

「そろそろとは思ったが・・・ついに帰って来れたんだな」

歓喜秘めた声で空梧は言う。

「それくらい経ったのか。よく分からないな。

正直帰って良かったのか・・・って考えてたよ」

「そう言うな。お前は良く頑張ったよ。だからここへ帰ってもいいんだ。

お前はお前らしくあればいいんだ」

「随分と年をとったよ・・・どうしようかな？」

「まだ十分に時間があるぞ？お前はまだやれる。」

空梧は俺の肩に手を乗せる。

「お帰り」

「ああ」

俺達は近くのベンチに座る。

「思えば、始まりは7年前になるよ」

俺は言い始める。ここまでに至った物語を語るために。全ての始まりが……。

「あの日から……全てが」

今思えば巡り合いの日々はあの日から流れたのだろう。もしかしたら俺だけじゃなく……。

序章（後書き）

一週間で1〜2回の更新となります。

出来るだけ長くしていきますので頑張ってください。

第一楽章 進行せよ、物語を

「うーん………」

俺は考える。物語を。俺自身が考えた先を。

「………ここから」

ここから先を書き出せ！

考える 生み出すんだ アイディアを プランを 進行する意味を
何を起こす？ 何をさせる？

どうしたら、ああなる？ さらにその先をどうする？ いつ終わら
せる？ いつ始めさせる？

いつまでここをやっているんだ？ ここをどう締める？ 納得でき
るか？ それでいいのか？

巡らせる！ その中にある複数の欠片を合わせて物語を完成しろ！
書くんだ！

そして次へ！ 更に次！ 編み出すんだ！ 俺の！ 俺だけの物語
を！

「おはようー！」

ドゴツと何かを頭に叩きつけられた。思考は無くなって、ぼんやり
と仰け反りながら上を見る。

「おはようー！」

2度挨拶した顔が目の前に反転していた。

金田 かなた 由美 ゆみ。子供の頃からの付き合い、幼馴染だ。

「仰け反ってないで挨拶！」

「うつせーな。せつかく人が良い調子になりかけたのに・・・」

頭を掻きながら椅子から立ちあがる。今は朝の7時30分。

早いな・・・というか一睡もしてないな・・・。

「まだ書いてたの？どれどれ？」

由美はPCを覗き見ようとしますが、俺は手の平で目を隠す。

「ダメダメ。何度も言うけど途中のは見せられない。色々言われて書き直すのは嫌だしな。」

俺は自分の作品が作りたいんだ」

「え〜いいじゃん」

「早く学校行くぞ！」

俺は学生服を手に取り着替える。

「その前に朝ごはん！せつかく持ってきたんだから食べて！」

由美は持ってきたであろう朝食のおかずをテーブルに並べる。

「頼んでもないのにな」

由美は毎日。朝 昼 夜と食事を持ってきたり作ってくれたりする。

「毎日シリアル食品やカップラーメンで過ごさないの！おかしくな
っちゃうよ。」

それに栄養取らないと頭が回らなくて書けないよ？」

「手が使えればいいんだよ。後はどうでもなる」

俺はそう言い、「ご飯と目玉焼きを食べる。
せつかくあるんだ。ちゃんと食さないとな。」

「昔から思っけど、何でこんな早くから学校に行かなきゃいけない
んだ？」

昼過ぎから登校すればいいと思うぞ。そうすればちゃんと授業を受
けられる」

「それは寝てない光だけ。遅くてもちゃんと寝ている他の人も巻き
込まないで」

「寝たい時に寝ればいいんだよ。人間、自然のままが一番だ」

そう会話しながら朝食を二人で食べる

「準備良い？」

由美は準備を確認して玄関を出る。続いて俺も。
学校に行こう。今日も頑張ってる。

「よし！……寝よう」

学校は寝る場所だ。

日々がまた来て終わる

12月23日 8時15分登校

俺達は昇降口に着く。

「じゃあ、またね」

由美は一年生なので違う道になる。由美は左、俺は真ん中。

「あ〜」

眠気を何とか抑えながら教室に向かう。早く寝たい。

カシヤ

「・・・・・・・・・・」

そんな音と共に俺の姿をカメラで撮った奴がいる。

「おっはよう。良い朝と景色だ」

カメラを片手に持ちながら挨拶してくる男。ショートカットにして、
金髪かがに染めている。

加賀 秋人あきと 高等部上がった時に知り合った。

何かと会えば、何かを撮っている。あのカメラで。

「元氣ないじゃないか？どうしたんだ？可愛い幼馴染と登校したつ
てのに。」

「ばっちりカメラに収めたぜ」

「消せ」

俺は教室に入ろうとする。こいつに付き合っている暇はないんだ。けど、秋人が俺の肩を掴む。

「離せ、俺は眠いんだ。一睡もしてないからな」

「え……？一睡もしていない？今朝幼馴染ちゃんと登校していたんだよな……。」

「じゃあ、まさか！一晩張り切ったのか！そうだったのか！」

廊下に響き渡る程の大きい声で秋人は言う。周りの人もこっちを見ていた。

「秋人……消されたいのか」

俺は人差し指をカメラのレンズに触れる。

「え？違うの？」

「分かってて言うてんだろ」

「なぐんだ。つまんねえの」

「お前がな」

俺はデコピンする以上の威力をカメラのレンズに放つ。

「うわあああ！俺の！俺のレンズ！」

秋人は必死にカメラのレンズを覗き込む。
周りの生徒はクスクスと笑っている。ざまあ見ろ。

「じゃあな」

俺はさっさと教室に入る。

「レンズ!!」

あいつの声は響いていた。そんな事気にせず俺は席につく。
先生の話が始まり、皆で並んで体育館へ行く。今日は終業式。
冬休みに突入する。先生の話をぼんやり聞いて、少し眠る。
終わって教室へ。先生が通知表を渡して終わり。

それじゃ・・・寝よう・・・と思ったが、まだ居残っている生徒
が喋っている。

それにこのままだと由美が来そうだ。俺はすぐ寝たいんだ・・・だ
から・・・。

屋上へ・・・。

「よし・・・寝れそうだ」

ちなみに屋上には入れない。ガツチリと鍵が掛けられている。
だけど俺は開けられる。この鍵で。ちなみに拾った。ここの扉付近
で。

今は教師達は面倒くさそうに放置しているので簡単に入れる。

「さ・・・とと」

俺は鞆を枕代わりにして眠る。やっと寝れる・・・。

寝れて……目を瞑る……そして……目の前に女の顔が……夢……か……いや……現実。

「起きてます?」

その顔は不敵に笑い……その口から流れる息が顔に当たる……現実だ。

俺は後ろに移動しながら起き上がる。

彼女の顔は俺の動きに合わせて俺の顔の目の前に位置するように動かした。

「何で……ここに?」

見つめ合いながら聞く。

「開いてたから」

そう言つて大人っぽい顔を近づける。

「あ……あの?」

「もつと顔を見せて……」

彼女の両手が俺の顔を固定する。まじまじと俺の顔を見る。

彼女は腰にまである黒い長髪が風になびかせていた。

眠気がどんどん無くなってくる……何なんだ。

「名前は?」

彼女が聞いてきた。答えよう。

「桐原 光です」

彼女の目はゆっくり瞑り、ゆっくり開く。

この時、俺はただ彼女を見ている。一瞬で何かが変わる瞬間を見逃さないように。

「私は雨苗あまなえ 未来みく」

現在

「そう。これが彼女との出会だった」

「運命の人ではなかったがな」

笑うように空梧は言う。

「いや、あれはあれで運命だ」

「だが、この後だろ？ 真実の運命は」

「そうだな・・・雨苗 未来はきっかけだったかもしれない。巡り合いの」

あの日に俺達が彼女と出会った事が全ての巡り合いの前兆だろう。

日々がまた来て終わる（後書き）

第一楽章は長くしていくつもりです。

章が変わる事に主人公は変わります。

（誰が主人公になるか予想してみてください）

しばらく更新は早くする予定です。

さあ、はじめよう。巡る運命を

雨苗 未来……確か3年生の人だよな。

秋人から聞いた話だと、上級生で密かに人気のある人物だって。

姿見もあまり見かけないらしく、それ以外は秘密でミステリアスな女性と。

「良いわよ。眠りなさい。もう十分」

彼女は手で俺の目を覆いかぶせる。

俺は……ただ目を瞑っていくしかなかった。そして……意識も。

15時55分

「う……ん」

俺はゆっくりと目を開ける。辺りはもう暗くなってきた。

起き上がって背伸びをする。そういえば……あの人はいないな。帰ったんだろ。それに鍵を閉めないまま寝ようとしたのか。教師たちに見つからないように気をつけないとな。

「よし」

俺は屋上から出ようとドアノブを手に取る。

「……?」

鍵がかかっている。確か鍵を開閉出来るのは、俺が持っているこの鍵でしか出来ないことだ。どうしてだ？

「……まあ、いつか」

あまり気にしないようにしよう。今度あの人に会えた時に聞けばいい。

そんな事を考えて階段を下る。その時、と静かに旋律が聞こえてきた。

これは……バイオリン。音楽室の方から聞こえてくる。

俺は音楽室へと向かって扉を開ける。

そこにいたのは170を超えている高身長の方が目を瞑りながらバイオリンを弾いている。

曲は彼がオリジナルに弾いている曲だ。そんな彼を俺は知っている。曲を弾き終えた音は目を開いて俺を見る。

「お、光か。まだいたのか」

宮本 空梧。中等部の頃に知り合った友人だ。

それなりのイケメンだが、面倒くさがり屋で三枚目だ。俺は良く知っている。

「寝てたんだよ」

「こんな時間までにか？余程寝てなかったんだな。寝不足は美容の敵だぞ」

空梧は言いながらバイオリンをケースに入れる。

「別にいい。俺は美容に興味はない」

「そうか。だが気をつけておけ。それと・・・」

ケースを持って俺に近づく。

「どうだった？」

「・・・俺はバイオリンやってないぞ」

「お前は関係なしに才能があるんだ。だからお前が感じた事は信じられる」

俺は頭を掻いて窓から外を見る。

「良い音だよ。誰から聞いてもそう感じられる。けど・・・表現は曖昧だった。急かしてるようだ」

「なるほど」

空梧は感心して顎に右手の人差し指と親指で挟む。

「言っとくが、これは俺の感想だ。他は違つぞ」

俺は音楽室を出る

「だが、決して良いわけではないだろ？」

空梧も音楽室を出て鍵を掻ける。

「……人による」

「正直言っても構わないぞ。もう十分に納得しているから」
俺の肩を数回叩いて

「では、よろしく」

軽くウィンクして階段を下って行った。

「はあ」

俺はため息をして、しばらく窓から空を眺めた。
俺も帰ろう。

16時30分

俺は学校から出て帰り道を歩く。
携帯を確認すると、メールが一件、着信が4件。全部由美だ。

「探してたのか」

メールを開く。

由美

用件：連絡

「どこにいるの？寝てると思うから、もう帰るね。」

夕食持ってくるからその時には帰ってきて！」

「お節介だな」

良く寝たし・・・今帰っても書けそうにない。

なら、ネタ探した。道を変更して俺は海へ向かう。

「おー良いな」

砂浜が広がっていて、潮風が吹いている。海だ。

さて、ゆっくり考えよう。俺は歩く。

「うーん」

俺は海を見ながら歩いていき、考える。

どうしようか？

「ん？」

数メートル先に制服を着ている女子が立っている。

同じ学校だ。といっても学校は日々鐘学園しかない。

海を見に来たんだろう。俺は構わず彼女の後ろを通り過ぎようとする。

「ねえ！」

いきなり腕を掴まれる！

「え！？」

セミロングに流れる茶髪の子。顔は・・・多分可愛いくらいだ。大きく開かれている目も良い。

「な・・・なに？」

けど、そんな事は関係ない。

彼女は俺の腕を掴んでじっと俺を見つめる。

何だ・・・何なんだ？さっきといい、今日は女の顔を直に見てばかりだ。

困惑する俺に彼女は発する。

「クリスマスの日に付き合ってください！すごく暇なんです！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

16時54分

鐘が鳴る。日々鐘の中心にある鐘の塔から鳴る。

この時間に鳴るはずが無い鐘が。けど・・・俺は気にする事が出来なくて。

そして彼女、相馬そうま 美紀みきとの真実の出会いが始まる事も。

さあ、はじめよう。巡る運命を（後書き）

今日から学校（高校）が始まるので遅くなってきます。なるべく早く更新出来るよう頑張ります！

唐突過ぎる出会いは

唐突なる出会い。

これを普通に考えられるなら彼女と付き合えるんじゃないか？と考
えてしまうだろう。

普通なら……。

「お願い！私と付き合ってよ！」

「……………」

これは傍から見れば告白と思うけど…………。

「クリスマスにか？」

「そう！何もする事ないの！」

「威張るな！それに俺は付き合っ気はない！」

「本当にお願ひ！じゃないと私、一人のまま夜を彷徨うよ！いいの
？夜中に女子を歩かせて！」

「勝手にしろ！関係ない！」

更に強く腕を掴んできた。

「君は用事あるの？」

「別に用事はない」

クリスマスはネタとしては良いが、俺自身はあんまり興味はない。いつも通り寝るだけだ。けど……多分由美がパーティーを開くんだろうな。

「じゃあOKね！」

「なに勝手に決めてんだ！」

「暇ならあたしと楽しく遊ぼう！大丈夫！良いクリスマスになるから！」

自信満々に彼女は言うてくる。

「だから……」

「お願い」

瞬間、彼女は悲しむような顔になる。

俺は……そんな彼女の顔を消したかった。ただ勝手に思ってしまった。

「……分かったよ」

パアアと彼女の顔は悲しんだとは思えないほどの笑顔になる。

「やった！よし決まり！」

かなり喜んでいる。

「場所は日々鐘公園の噴水前ね！時間は1時！分かった？」

「ああ。明後日のクリスマスだよな？」

「うん」

彼女は満足したようで、俺から少し離れた。

「私は相馬 美紀。2年生よ。・・・知ってる？」

同級生だったのか。けど、見たことは無い気が・・・。
というか、俺が寝てばかりだけか。

「いや」

俺は知らないと伝える。

「そっか・・・。君の名前は？」

「俺は桐原 光。同じ学年だ」

「うん！よろしくね！」

彼女は携帯を取り出して俺に向ける。

「ほら、携帯取り出して」

「ん？・・・ああ」

アドレス交換か。携帯を取り出して、赤外線で交換する

「電話番号も」

「ああ」

交換を終えて携帯を閉める。彼女は離れていき。

「じゃあ！待ってるからね」

大きく手を振って行った。

「……何なんだ」

俺は俯いて、少しして再び顔を上げる。

カシャ

この音は……。

「ありがとうございます」

カメラを持った奴がニコニコする。

「……いつからいた？」

「いや〜。お前を見かけたんで声をかけようと思ったら、お前が相馬と会ったからさ」

「……最初からいたのか」

「十分収穫を頂きました。本当にありがとうございました」

「それ・・・どうするんだ？」

「どうしようかな。新聞部にでも提供しようかな。」

あの相馬 美紀が睡眠魔の桐原 光と接近！ってな感じで

「いや、お前は提供しない。絶対に」

俺は真剣に言った。断言する。

「・・・そうだよ。俺の写真は俺のだ。だれにも触れさせない」

加賀はカメラを見て静かに言う。

「というわけで」

俺はカメラを奪い取る。

「あ！！おい！！」

「お前の写真だが。写ってるのは俺と彼女だ」

俺は即効この場で撮った写真を消す。

23枚も撮っていたのか・・・。操作し終えて返す。

「あーあ」

しょんぼりとカメラを見つめる。

「ところで、あいつ知ってるのか？」

「……ん？知ってるも何も、俺らの学校では知らない奴いないぜ。

容姿端麗。成績優秀な彼女、相馬 美紀だ。お前が知らないってのも仕方ないな。交友少ないし、寝てるし」

あいつそんな有名だったんだ。

でも俺は寝てたとはいえ、知らなすぎたな……。

けど、最後のは確かに……あまり友人はいないな。少し痛い気がした。

「去年同じクラスで知り合いだ。まあ、俺は興味ないけど」

加賀はカメラを操作しながら言ってくる。

「面倒になったな……」

「まあまあ頑張ってくれ。もしかしたら良いことがあるかもしれないぜ。

あの相馬とな……」

「何だよ？」

「生はだめだぞ、生は」

「カメラ……壊すか？」

すぐに理解する俺も俺だが、こいつにムカツク。

「じゃ、またな」

逃げるように去った。

「はぁー」

俺はため息をする。

「本当に面倒くさいな・・・」

帰宅すまで何十分かここにいた。

語られる不安

数十分くらい海にいた俺は家に帰宅して、先に来ていた由美と手料理が迎えてくれた。

ちなみに何故由美が先家にいるのがというと、鍵を渡してあるからだ。

待たせるのは悪いと思って。

「どこに行ったの？」

「海」

簡略に言う。多分何していたか分かっていると思うから。

「どうだったの？」

「全然」

というか、ネタ探しは出来なかった。それどころでは無かったからだ。

「いただきます」

由美の作ったカルボナーラをいただく。

「明後日大丈夫？」

明日？何かあったか？

いきなり驚いてきた。フォークに絡めてあるパスタが落ちたぞ。

「な……なんで？なんであの人と？」

ワナワナと震えている。どうしたんだ？

「やっぱり知ってるのか？」

「知ってるも何も！あの人に憧れている生徒は少なくないわよ！学校で有名な才色兼備って言われてる人よ！どうしてそんな人と光が!?!」

加賀の言った通りに、あいつそんな人だったのか……。やっぱり俺何も知らなかったんだな。

「落ち着け!」

少し黙った。

「……………何で？」

「いきなり約束されたんだよ。暇だから付き合えて」

「……………そうなんだ」

落ち込んでるのか？

「うーん……………どうして光なんだろ？」

俺じゃ悪いのかよ・・・行きたくねえのに。

「じゃあ・・・明日は？」

明日・・・クリスマススイブか。

ゆっくり寝たいけど、何か由美に悪い気がするな。何でだ？
まあ、いいか。

「ああ、しょうがないな」

「決まり！」

由美は笑顔になり食べ始める。
はあく。ゆっくり寝たいのに。

21時00分。

由美は帰ろうと玄関に行く。

「明日10時に来るね。ちゃんと起きてよ」

「分かった」

「じゃあね」

帰って行った。

よし・・・昼に寝たけど、何か色々あって疲れたから寝よう。

明日の事もあるし、寝てられないな。

自室へと入る。

「ふう」

一息ついてベッドに座る。

「う……」

頭を抱える。

何か頭から全体に不快な違和感を感じる。何年か前から時々現れている。

自分が自分でいられないような気分だ。

「くっ！」

俺は立ち上がり棚からCDケースを出して、そのCDの音楽を流す。クラシック音楽のピアノ曲。その曲を聴いていき、落ち着くようにする。

「……はあ……はあ」

再びベッドに座って横になる。

大丈夫……か？

俺はリモコンでCDの再生を止めて、ゆっくりと意識を無くしていく……。

ここは……？

どことなく、うつすらとした暗闇。視界はただ何も見えないようだ。

コツ・・・コツ。

足音が聞こえた。その方向・・・後ろを向く。

・・・誰だ？

身長は俺と同じくらいの男だ。年齢も・・・俺と同じくらいか？

「お前はどうか？」

男はニヒルに笑う。俺は言葉を発しようとするが・・・出ない。

「時は進む。逆らう事は出来ずに進む。勝手にな」

淡々と言葉を発していく男。

俺は頭を抱える。恐いのか・・・？

「明日を望みたい。だが、今日という日を手放したくない。変わって、変わり続ける。」

お前が見えている「色」は、今は綺麗に分かってても、未来の色は見えない。何も見えない」

それを聞き入れていく俺・・・深く頭を抱える。

やめる・・・やめる！

「お前は進めない。流れる世界で」

男は踵を返して、歩いて去った。消えゆく煙のように。

俺はただ頭を抱えたままだった。

今日もいつの日でも（前編）

夢から起きた。何の夢だ・・・？

現れた男の人も誰だ？

リアル過ぎる感じがした。

「何なんだよ・・・」

時間を確認すると午前10時に近かった。

「大丈夫？」

ドアから由美が覗いてから出て来た。

「ずっと苦しそうだったよ」

苦しんでた？多分夢のせいか。

「嫌な夢見ただけだ」

俺はベットから起き上がる。

「悪い。すぐに準備する」

「うん」

由美は部屋から出る。

只の夢だ。あんまり気にすることはないか。
すぐに身支度をする。

部屋から出ると、台所のテーブルに朝食が置かれていた。

「まだ食べてないでしょ？」

「ああ」

二人で朝食を食べる。

「どこ行くんだ？」

「まずはショッピングしよ」

そういえば、去年のクリスマスでは多く荷物を持たされたんだ。

「あんまり買っちなよ」

「その時の気分だね」

朝食を食べ終わって、アパートの家を出る。

俺達は歩いて数十分のショッピングモールへと着く。

11:50

「とことん付き合ってもらっからねー！」

「分かったよ」

はあとため息をつく。

「明日の分も楽しまないと損だよ」

最悪だな……。

「まずは新年に向けて服を買わないと」

「はいはい」

女性向けの服屋へ連れて行かれる。

というか、周りは女性ばかりで下着とかが置かれている。かなり恥ずかしすぎる。

「外で待っていていいか？」

「ダメ。選んでもらうから」

自分で選べよ……。周りの人の目が痛いから早く出たい。早く選べ！

「うーん。これはどう？」

「それでいいんじゃないの？」

「真面目に選んでよ！あんまり見てないし」

「真面目に選んでられるか！いいんだよ！お前は何着ても似合うか」
「ら」

「え……。何でも似合う？」

少し戸惑ったように聞いてくる。

「ああ。今のお前でも十分良いんだよ」

「う・・・うん」

由美は少し俯いている。というか、周りの人の視線が痛くなってきたような・・・。

「とりあえず、それくらいで良いだろ。買ったぞ」

一刻も早く店から出たかったため、少し強引に会計を済ませる。

「次はどこに行くんだ？」

「え・・・えーと」

由美は辺りを見回す。

「ま・・・まだまだショッピングよ！買わないといけない物が沢山あるんだから」

はあ・・・。。。またも店を連れ回される事になった。

「昼食にしようよ。もうお昼過ぎだし」

腕時計を確認する。確かに午後2時に近い。
荷物も多い

「そうだな・・・あの店で」

すぐ近くにあったファミレスへと昼食をとることにした。
店員に案内されて席へ座る。

俺と由美一緒のランチセットを頼んで、早く運ばれて食べる。

「買ったね」

「買いすぎだ。もうちょっと考えてから買え」

「そうしときます」

買い物を終えたんだ。後は何をするんだ？

「後はどうするんだ？」

「色んな所見て行こうよ」

「そっか」

それなら楽しそうだ。

食べ終えて店から出る。

まずは日々鐘公園へと向かう。

「やっぱり広いねー！」

由美は両手を広げながら言う。

「確かにな」

中心に噴水があって、公園とは思えないほどに広々とした草原。

そう言えば、明日ここで待ち合わせだったな・・・面倒くせえな。

「ここって別名があったよね」

「別名・・・ああ、確かあったな。「無限の地」って呼ばれてるんだよな」

ここから周りを見ると無限に地があるように見える。
大した名前だ。

「それもあるんだけど、私知ってるのは他に朝は「希望の場所」と言われてるよ」

「へえ」。知らなかった」

「もう一つあるんだよね・・・」

「もう一つ?」

「確か・・・」

由美が言おうとした瞬間。

カシャ

カメラのシャッターが聞こえた・・・まさか。

「おはよう」

顔をニタニタとしながらカメラを構えながら現れた。

「楽しんでますね」

はぁ・・・面倒くせえ。

今日もいつの日でも（前編）（後書き）

少し遅くなってしまいました。

誤字があつてしまった箇所も直しました。

以後無いように努力していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8510h/>

ロード 運命の流れ

2010年10月28日07時24分発行